

服飾デザインに見る呪的な問題について

——ドット（水玉模様）の図像性を中心として——

今 木 加代子

はじめに

今日「水玉模様」など極く当たり前の「点の模様」と解釈し、その相違、発生・起源など問題でも無いように思っていたが……。英語辞書によると“dot”点・持参金とあり、国語辞典で初めて「水玉」水のしぶきとなっている。

古今東西の衣装に見るドットを通し、点は点でもその発生の意図の相違、ドットが如何なる意味、呪的な性、図像性を含みつつ、東西に広く伝播するかを探索しようとする。

1 ドットと気孔・毛孔について

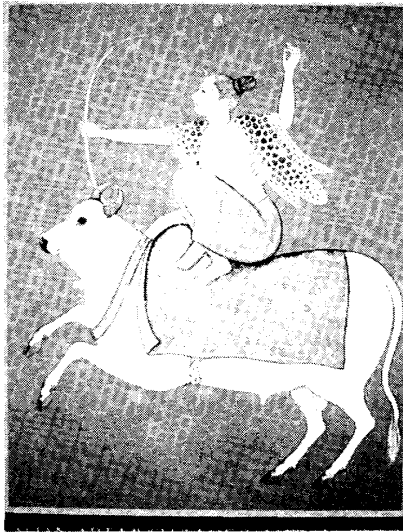
学研漢和大字典（藤堂明保編）に「孔」の解字を見ると「子（小さい）＋し印（曲げて通す）」を組み合わせて細いあなが通ったさまを示す。一説に孔雀をあらわすとも、子授けの吉祥をもたらす鳥のことともいう。普通は空（あな）に当てる。とあり、「気」の解字は、気は、いきが屈曲しながら出てくるさま、氣は「米＋音符气」の会意兼形声文字で、米をふかすときに出る蒸気のこと、乞キツ（のどをつまらせて息をはく）、慨ガイ（のどをつまらせてため息をはく）などと同系のことば、とある。

又その意味は、人間の心身の活力「気力」「正気」「養気」。人間の感情や衝動のもととなる心の活力「元気」「気力」。形はないが、なんとなく感じられる勢いや動き「気運」……とある。動植物を含めた、生き物の持つこの「気孔」こそ、“ドット・点”としてデザインされていることが、特にイスラム文化圏に顕著にみられ、これらを列挙しつつ、その発生と伝播を探ろうとする。

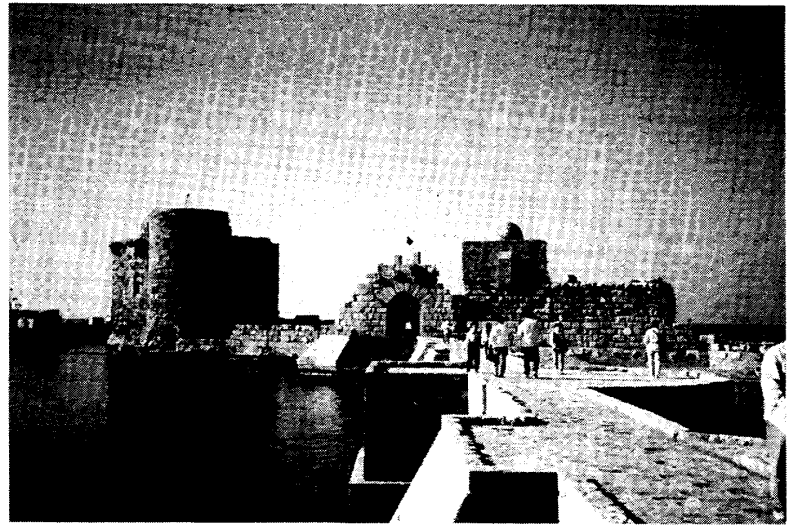
1 図¹⁾ “ESSENCE OF INDIAN ART”の表紙に記される、インド・ヒンドゥー教の神シヴァ神で、ストールとして使われる豹の毛皮が、まさしく“ドット”で描かれている。

2 図 文明の夜明けの地と言われる地中海、その東沿岸レバノンのシドンの港は、陸の船と言われる駱駝の隊商の宿地であり、かつて東西文化の交易品の積載に賑わったであろう、大きなキャラバンサライが、今尚 当時の面影のままにたたずむ街でもある。

そのシドンの港の突端に、ライオンの寝そべった姿をアレンジした、ライオンの砦があり、この入口はライオンの顔である。その胴部の石組みの中には、まさしく3図にもみるような石の



1図 ヒンドーのシヴァ神 (インド)
ESSENCE OF INDIAN ART より



2図 ライオンの砦 (シドン) 1995年3月 著者撮影

“ドット”「気孔」があり，百獣の王ライオンの気力に満ちた息使いが，永遠にシドンの砦を守っていることにもなっている……。

3図 文明の交易路として繁栄の歴史を持つ，当沿岸沿いの古都ビブロス，ティールなどの石垣には，このドットが頻繁に見られ，相づく他民族同志の攻防戦の中で，街々，家々の守護役を願い，嵌め込まれたであろう石垣の「気孔」に，事新たに“ドット”の包含する呪的意味の大きさを，確認した思いがする。

4図 スペインアンダルシア地方と言えば，闘牛，ジプシーで賑わった街であり，フリルで埋めつくされた衣装で，巧みなギター之音に乱舞するジプシーは，総べてと言っても過言では無い程，大小，色取り取りの水玉模様に含まれている。

ジプシーの詳しい歴史はその道の御専門に依存するとしても，一説にはパキスタンを発祥に，キリスト教への入神を拒み，幌馬車を居に流浪の歴史をたどる。農耕，葡萄酒作り，等々……手伝いつつ，様々な文化の運搬役をもになっている。

カルロスⅡ世の命でグラナダ，サクロモンテの洞窟に居を得ても，苦闘の生活史を振り切るが如くに，かんと冴えた月光の夜，戸板をコツコツとたたく音にはじまり，動物の悲鳴のように歌い出し，やがて血わき，肉踊る，人間の魂の奥底にあるものを絞り出すが如き慟哭の姿……を，スペイン語で“デュエンデ”とあり²⁾，夜を徹してでも踊り明かすフラメンコの衣の“ド



3図 シドンの街の塀 (レバノン)
1995年3月 著者撮影



4図 ジプシーのフラメンコの衣装



5 図 舞踏塚の壁画(韓国)
韓国美術全集4 壁画 所載



6 図 楚国の巫者(中国)
中国歴代服飾史 所載

ット”は、まさしく“デュエンデ”であり、又生氣のほとばしる「気孔」の具象の形となっている……。同時に 薔薇の花びらの如き重厚なフリルとあいまって、往年のシャマニズム的神仙思想「鳥の生態」のアレンジとも解釈している。

5 図³⁾ 韓国(輯案通溝^{しゅうあんつうこう})舞踏塚の壁画の衣装は水玉模様である。貴人は大袖の袍を着るがこの画は筒袖状で、踊り子でもある。又 右二人の裾に覗く袴のプリーツは、鳥の尾を象徴するもので⁴⁾、水玉の気孔とあいまって、羽ばたく鳥の姿のアレンジであり、舞踏塚に描かれていることから、「水玉模様」は、先のジプシーとも相通ずる、舞踏家の衣として象徴化されていることがわかる。

6 図⁵⁾ 中国春秋戦国時代、揚子江中流の地を領有した、楚の国の巫者のスタイル画で千金白狐とあり、獣の毛皮で作った服「狐裘^{こきゅう}」を着た巫女である。(裘は狐の毛皮で作った服)

古来 原始宗教シャマニズムのシャマンは、驚みみずくの剥ぎ皮の呪衣を纏い、天と地の間を自由に飛びかう鳥の如くに振る舞い、現世と来世の中継の如き役をはたしている。遊牧社会の歴史の中で、各地各様の象徴的動物の毛皮を、又 類似の衣を纏う巫者の存在は顕著で⁶⁾、ここ楚の国では、白狐が値千金の動物であり、その裘が“ドット”で表現されている。

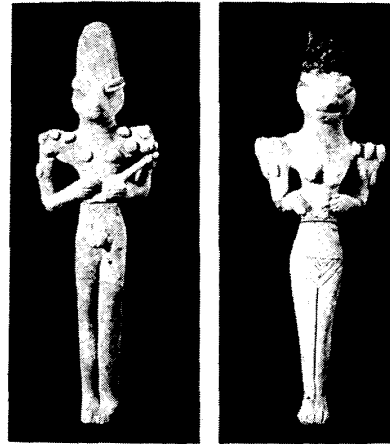
これ迄のスペインのジプシーも、舞踏塚に描かれる踊り子も、中国の巫者も、羽ばたく鳥の如くに舞う姿が、“ドット”で図像化され、東西に広く伝播している……と、言うのは未だ速すぎるであろうか。

2 古代のドットについて

7 図⁷⁾ ウルの「スタンダード」と提唱される、木箱の側面のモザイク絵で、「戦争」の面、「平



7 図 槍を持つ兵士 (ウル出土)
大英博物館所蔵 (木箱のモザイク)



8・9 図 男女の土偶 (メソポタミア)
イラク国立博物館 所蔵

和」の面があり、BC 2600 年頃とされるメソポタミア、シュメール王朝期の風俗がしのばれる有名な木箱の一部である。三段に描かれる中段で、槍を持つ兵士の姿であり、その前には捕虜が裸にされ連行されている姿がある。はおるマント状には毛皮の気孔と解釈される“ドット”があり、前裾のスカートは羽毛のようで、全体で鳥、或いは梟のアレンジと解釈される。かねがね兵士の鎧は梟であることを述べており⁸⁾、BC 2600 年の昔から、衣は鳥のアレンジの多いことも確認出来る。

8・9 図⁹⁾ 細身の男性・女性の土偶で、BC 3700 年メソポタミア、ウバイド期のテラコタである。解説には、神なのか、悪魔なのか、又怒肩と上膊につけられた小さな粘土塊は何を表現しようとしたものかわからない。………とあるが、飛翔の願望の象徴、翼の持つ生气・気孔、これこそ“ドット”と解釈される。



10 図 「鳥の占い師」の墓の壁画
(エトルリア文化)タルクィニア

10 図¹⁰⁾ BC 520 年エトルリア文化期の「鳥占いの墓」の壁画で、様々な占師の姿の群の片隅に、当図の床机を肩に運ぶ若者の姿がある。他の呪者は皆無地のトガの装いの中、この下働きの若者の短いチュニックにだけ“ドット”がある。

従って有史以前から、“ドット”は7 図の一兵士、10 図の一労務者と従者に多く見られ、又毛皮そのものを意味するもの、或いは布、タバ的 (木の皮をたたき伸ばした古来の不織布的なもの) な衣の素材の進展後も、毛穴・気孔のイミテーションとしてつけられる模様と解釈出来る。

3 ドット=持参金について

11 図¹¹⁾ Palestinian Samu'ah, southern Hebron hills 地方のヘッドドレスであり、コットンの地

に絹糸で綿密なクロスステッチのうめられた帽体に、シルバーのコインが実に緻密に取りつけてある。普通は上部の帽体のみの素朴な型に、徐々に永い時を掛け後につけ加えていくもので、ウエディング時に下部の垂れ下がるアクセサリーズをとりつける。それらは四つのポイントの星、三角形のホワイトメタル、種々のガラスのお守り、プラスチック、イミテーションパールと珊瑚のビーズ、メタルの円盤、……となっている。



11 図 ヘッドドレス (パレスチニアン) Palestinian Costume より



12 図 ヘッドショールと持参金 (パレスチニアン) Traditionai Palestinian Embroidery-and Jewelry より

12 図¹²⁾ 同じくパレスチナ

Hebron 地方のウエディング ドレスで、ここではヘッドショールともあり、各地方でショールの部分に変化する。当図では葡萄の蔓、糸杉の枝、スクエアー、月、星と花……がアレンジされており、加えて後ろの馬は、遊牧民にとって人よりも大事な財産、広大な大地での生活の脚でもある。

当ヘッドドレスのコインこそ“ドット”そして又「持参金」の所以であり、ここまで緻密につける頭頂のコインには、毛髪・気孔と同種の意を含んでいるようにも思われる。

ま と め

古来 原始宗教シャマニズムでは、鷲みみずくを装う呪衣で、鳥に変身したシャマンが中心となり、村人の安穏を祈祷祈願する。その呪衣は動物の毛皮そのままであったり¹³⁾、技の進展を見る民族衣装の中にも、鳥への変身願望に満ち溢れた鳥の・羽の生態、或いは気孔のアレンと見られる模様・刺繍は (特に雲南ミャオ族の民族衣装を通し)、これまでもいくつか述べて来た¹⁴⁾。ここイスラム文化圏で、特に総べてのジブシーが水玉模様の衣にくるまり乱舞する姿は、生物の・鳥の、「ほとばしる生気の発露の具現の姿」と見られ、“ドット”は踊り子の、象徴として、遙か東洋にも交流しているものと考察される。

かねがね鎧は梟のアレンジとも述べており¹⁵⁾、7 図の兵士の“ドット”も又梟のようでもあり、古今東西を通じ兵士は呪的祈願にくるまれ戦場に挑むことも読みとれる。

又総べての財を身に纏い移動する遊牧民にとって、頭頂に蓄える“コインドット”が生涯をかけたくわえる「持参金」となっている。常に様々な心情の伝達役を果たしている頭装は、遊

牧の民の、巧みな生活の知恵のようでもあり、日本の文金高島田もこれに類するものか……と、今後の課題とも考えている。

注

- 1) B.N. GOSWAMY ESSENCE OF INDIAN ART MAPIN PUBLISHING PVT. LTD. AHMEDABAD
- 2) 中林淳真 ギターを肩に世界を歩く(作曲家・ギターリスト) NHK ラジオ談話室
- 3) 韓国美術全集4 壁画所載 韓国服飾文化史 柳喜卿・朴京子 源流社
- 4) 今木加代子 服飾デザインのルーツを求めて —コーリアンの衣装にシャマニズムを探る— 日本服飾学会誌 第3号
- 5) 袁杰英編著 中国歴代服飾史(中国) 高等教育出版社
- 6) 14) 今木加代子 服飾デザインに見る呪的な問題について —プリーツと尾のかかわりを中心として— 帝塚山短期大学紀要 30号
- 7) 大系世界の美術2 古代西アジア美術 学研
- 8) 15) 今木加代子 服飾デザインに見る呪的な問題について —梟と鎧のかかわりを中心として— 衣生活研究 127・128 合併号
- 9) 大系世界の美術2 古代西アジア美術 学研
- 10) 大系世界の美術4 古代地中海美術 学研
- 11) SHELAGH WEIR Palestinian Costume BY BRITISH MUSEUM PRESS
- 12) ABED AL-SAMIH ABU OMAR Traditional Palestinian Embroidery and Jewelry (ARAB) AL-SHARK
- 13) 今木加代子 服飾デザインに見る呪的な問題について —シャマンの衣装を中心として— 衣生活研究 134・135 合併号